明治三十四年における子規俳句の考察

―句風確立期における低迷と、そこからの超克―

柴田奈美

（要約）

正岡子規の俳人としての生涯における明治三十四年は、例えば悟得時代（寒川鼠骨）と称されており、平淡な句風の確立した時期といわれている。古句の影響を脱して、どのように自分の句を確立したのか、平淡な句風を目指した余りに、ただ事俳句となってしまった低迷をどのように克服したのかを、具体的に例句を挙げつつ考察した。

（キーワード）

明治三十四年の子規俳句・俳風の確立・平淡・月並・ただ事俳句・工夫

はじめに

病床の正岡子規は、明治三十四年に入ると、次第に横腹の痛みが激しくなり、長い文章の執筆は難しくなってきた。そのため、「墨汁一滴」という短文が「日本」に一月十六日から同年七月二日まで連載された。物を書くことができなければ「生きるかひもなし」（「墨汁一滴」一月二十四日　『子規全集　第十一巻』九六頁）と述べ、「朝々病の牀にありて新聞紙を披きし時我書ける小文章に対して聊か自ら慰むのみ」と結んでいる（同前）。活字になった自分の文章や文芸作品を改めて読むことによって、自分が生きていることを実感していたのである。

五月下旬には病状がさらに悪化し、「墨汁一滴」も律が筆記するようになる。長い俳論はほとんど見られなくなるが、一方で俳句以外の短歌への熱意が高まり、「墨汁一滴」には有名な藤の花ぶさ十首をはじめ、山吹の花などを題材に、まとまった数の作品が発表されている。体力は衰えていく一方のこの時期に、創作意欲は充実しており、俳句も五二四句を作っている。次第に句数は少なくなっているものの、一か月に約四四句を作っている計算である。次第に子規らしい俳風を確立してきたこの時期に、子規独自の俳句がどのように創られているかを、具体例を挙げて指摘したい。

引用した古句は、子規が編集した『分類俳句全集』の復刻版『分類俳句大観』（日本図書センター　平成四年）所収のものである。

（一）　写実的な句

（1）　花籠に皆蕾なる辛夷かな

子規（『子規全集　第三巻』講談社　三八九頁　以下頁数のみ記す）

「日本」（四月十四日）に発表。花籠には皆蕾ばかりの辛夷が活

けられていることだ、との句意。「皆蕾なる」が写実的表現。古句には、「辛夷」は次のように「にぎりこぶし」「おきあがりこぶし」と、掛詞的に詠まれることが多かった。

鷹をいつすゑしこぶしの花の枝　不竹「鷹つくは」第三巻三三三頁

ちれは咲く花はおきあがりこぶし哉　忠俊「記入なし」第三巻三三三頁

咲枝を折手も握りこぶし哉　重頼「記入なし」第三巻三三三頁

子規は、このような花の名前から連想される「にぎりこぶし」、「おきあがりこぶし」という表現は用いず、「皆蕾なる」という写実的表現を用いて、花の状態を描写している。「皆蕾なる」に、「開いてはいない、にぎった状態の」という意も伝統を踏まえて鑑賞すれば窺えるが、あくまでも平淡な写実的表現に抑えて、機智的表現を避けている点が指摘できる。同時に「辛夷」を句材をして、次のような作品が発表されている。

石燈籠の位置定まらぬ辛夷かな　子規（三八九頁）

山陽の軸に配する辛夷かな　子規（三八九頁）

題目の碑がある寺の辛夷かな　子規（三八九頁）

辛夷咲く垣根もありて家まばら　子規（三八九頁）

いずれも、「辛夷」の花にさまざまなモノを取り合わせて、一句にまとめた作品である。病床に活けられた辛夷の花から、連想を自在に広げて作られた群作であったのではないだろうか。

（2）　山吹や三角の蕾一列に　子規（三九二頁）

「日本」（四月二十一日）に発表。「三角の蕾一列に」が写実的表現。古句に類句はなく、山吹の花そのものの形状をよく見て作った写生の句と考えられる。蕾の形が三角で、一列に並んでいるということを、写生の目によって発見したのである。

（3）　一群の托鉢僧や五月晴　子規（三九七頁）

「日本」（七月十一日）に発表。五月晴れのある日、一群の托鉢僧が寺から町へ出ていかれていることだ、との句意。墨染の衣の托鉢僧が多勢で歩いておられる姿には目を奪われる。晴れやかな五月晴れのすがすがしい気分と、悟りの修行をされる托鉢僧の取り合わせがふさわしい。「一群の托鉢僧」が大づかみな表現でありながら、情景を端的に表せているのである。

（4）　秋ノ灯ノ糸瓜ノ尻ニ映リケリ　子規（四〇四頁）

「仰臥漫録」（九月九日）所収。秋の夕暮れ、室内が薄暗くなってきたので、灯をつけたところ、その室内の灯が糸瓜の棚の糸瓜の尻に映ったことだ、との句意。残暑に苦しみつつも、糸瓜を凝視して平淡な味わいのある写実的な句を作っている。

（5）　雪雲の縁を色どる冬日かな　子規（四二六頁）

「日本」（二月二十五日）に発表。冬の夕陽が雪雲の縁を、オレンジ色に色どる冬の日であることよ、との句意。四季を通じて、雲はさまざまに変化し、趣きを変えて行く。掲句は冬の雪雲を眺めていた時に、夕日が射して雪雲の縁を色どった様子に目を留めたものである。写生の目による把握であろう。

（二）　感覚的な句

（1）　びろうどの青きを好む懐炉かな　子規（四二二頁）

「日本」（二月九日）に発表。懐炉を包む布は手触りのよいビロードである。その色は青色が好きだ、との句意。「天鵞毛（びろうど）」は外来語であるが、「丙号」には項目立てられて、次の三句が収録されている。

雪を織てびろうど白し太山姫　　峡水「虚栗」第十一巻四二八頁

天鵝絨で人を撫でるや春日和　　涼山「古今句鑑」第十一巻四二八頁

天鵝毛の財布探して年の暮　　惟然「続猿蓑」第十一巻四二八頁

一句目は、積雪の美しさを光沢のある白いビロードにたとえたもの。二句目は、春日和のやわらかな日射しを、感触のよいビロードにたとえたもの。三句目は実際にビロードで作られた財布を句材として、手になじんだビロードの財布を探す年の暮よ、としたもの。子規の場合、「懐炉」という卑近なモノを包む布としてのビロードを詠みつつも、「青きを好む」と色彩美に注目した点が特色である。

このような色彩美を中心とした句として、次のような句がある。

何も書かぬ赤短冊や春浅し　　子規（三七七頁）
「日本」（三月二十四日）に発表。

白けしも坊主赤けしも坊主かな　　子規（四〇〇頁）
「日本」（六月十二日）に発表。

栗飯ヤ糸瓜ノ花ノ黄ナルアリ　　子規（四〇五頁）
「仰臥漫録」（九月九日）に所収。

伊勢の芒生（注一）より蛤を送り来る　　子規（三七五頁）

（2）　蛤の口より伊勢の初日哉

「俳句稿」（明治三十四年）に所収。伊勢から送ってこられた蛤を、水に浸けていたところ、あの小さな口から伊勢の初日を吐き出したことだ、との句意。空想的、大胆な句風の句。

（3）　神の子に追はれて上る雲雀かな　　子規（三八五頁）

「日本」（三月三十日）に発表。『春夏秋冬』所収。翼のある神の子が空を自由に飛んでいる。その神の子に追われて舞い上がる雲雀であるよ、との句意。神の子と天高く舞い上がる雲雀の取り合わせが浪漫的である。「神の子」の幻想はまず、小説「花枕」（「新小説」明治三十年四月『子規全集　第十三巻』）に「～此処に飛び来れるは、ささやかに美しき神の子二人、何処よりか採りて来し種々の花を植ゑ試みつゝ、白き羽の一人は黄なる羽の一人に向ひ～」（二八一頁）と表現されている。次に、翌年には随筆「小園の記」（「ホトトギス」明治三十一年十月　『子規全集　第十二巻』）に「狂ふにつけて何処ともなく数百の蝶は群れ来りて遊ぶをつらく見れば蝶と見しは皆小さき神の子なり」（二三六頁）と表現されている。両作品ともに、神の子を蝶のイメージにだぶらせて描いている。掲句は草原に舞う蝶のような神の子をイメージしつつ、浪漫的世界を楽しみながら作った句であろう。

因みに、この年三月十二日の「墨汁一滴」には「不平十ケ条」が載っており、現実的な不平を九つ挙げた後に、「人間に羽の生えて居らぬ不平」を挙げている。このような「羽」へのあこがれから、掲句は生まれたものであろう。体は寝返りもできぬ程身動きのできぬ状態に衰えていく一方、精神はより一層自在に飛躍して、このような浪漫的な句も生み出していることが指摘できる。

（4）　夏山の骨とも見ゆる巌かな　　子規（三九七頁）

「日本」（七月一日）に発表。青々とした夏山に白く突き出た巌がある。それはまるで夏山の骨のように見えることだ、との句意。子規は体中が痛み、毎日包帯を換える時に、膿を出してもらっていた。腐りつつある自分の体を、骨のような巌の突き出している夏山のイメージで表現したのではないだろうか。写生ではなくイメージの中で作られた作品である。

（5）　餓鬼モ食ヘ闇ノ夜中ノ鰌汁　　子規（四〇五頁）

「仰臥漫録」（九月二日）に発表。母親の松山での昔話をもとに

作られた句。「仰臥漫録」（九月二日）には、「松山木屋町法界寺ノ鰌施餓鬼トハ路端ニ鰌汁商フ者出ルナリト　母ナドモ幼キ時祖父ドノニツレラレ弁当持テ往テ其川端ニテ食ハレタリト　尤旧暦廿六日頃ノ闇ノ事ナリトイフ」（『子規全集　第十一巻』三九〇頁）とある。路端で商っている鰌汁を、今日は施餓鬼の日なのだから、餓鬼たちよ、安心してこの夜中の闇にまぎれて食べよ、との句意。腹痛のため鎮痛剤を飲んだことが、この日の記事に見られる。その後に、「母モ妹モ我枕元ニテ裁縫ナドス　三人ニテ松山ノ話殊ニ長町ノ店家ノ沿革話イト面白カリキ」（同前）とある。子規の苦痛を和らげるために、母と妹の律は子規の枕元で手仕事をし、子規の面白がる話をしていた様子が窺われる。

掲句は、母の昔話から発想されたものと考えられるが、さらに宮坂静生氏は次のように指摘しておられる。

「大食による食い過ぎのためはげしい腹痛にみまわれる。餓鬼とは反対の状態であったが、松山の懐旧談から鰌施餓鬼のことが話題になったのであろう。子規には、痛苦を分かつものとして餓鬼が身近に感じられたのだ」（『子規秀句考―鑑賞と批評―』明治書院　平成八年九月　四三五頁～四三六頁）。

「餓鬼ノ食フ」ではなく、「餓鬼モ食ヘ」と副助詞を用い命令形にしたところに、宮坂氏の指摘される子規にとって身近な存在の「餓鬼」が感じられる。

氷水ニ葡萄酒ヲ入レテ飲ム

（9）　氷噛ンデ毛穴ニ秋ヲ覚エケリ　　子規（四〇四頁）

「仰臥漫録」（九月九日）所収。残暑の厳しい折、氷水に葡萄酒を入れてもらって飲んだ。その氷を噛んだところ、体中がぞぞっとし、鳥肌が立った。毛穴に秋の訪れを感じたことだ、との句意。「毛穴ニ秋ヲ覚エケリ」は実感であろう。明治三十年には、

八万の毛穴に瀧の風涼し　　子規

を作り、「反省雑誌」に「瀧」の題で発表していた。このように過去に作った自分の句が時を経て、新たな作品の発想の基となっていることが指摘できる。

（三）　境涯句

毎日の発熱毎日の蜜柑此頃の蜜柑は
稍々腐りたるが旨き

（1）　春深く腐りし蜜柑好みけり　　子規（三七八頁）

「日本」（四月十六日）の「墨汁一滴」に発表。春の蜜柑の、もう腐りかけているもの、それが自分には甘くおいしいのだ、との句意。腐りかけの蜜柑が好きだ、とした点に果物好きの子規の特色がよく出ている。

因みに、明治三十年には、

つり鐘の蔕のところが渋かりき　　子規

を作っていた。愚庵から貰った柿へのお礼として詠んだ句。同じく短歌で返礼したものの中に、次の歌がある。

柿の実のあまきもありぬかきのみの
渋きもありぬしぶきそうまき　　子規

（愚庵宛書簡　明治三十年十月二十九日『子規全集　第十九巻』二〇九頁）

「しぶきそうまき」と断定した子規の果物の通ぶりが、掲句の場合「腐りし蜜柑好みけり」と表現されているのである。重病人でありながら、子規の食欲はこの時期になっても衰えていない。次のような「食べる」ことを題材とした句を、この年にも作っている。

病牀に日毎餅食ふ彼岸かな　　子規（三七九頁）
土筆煮て飯くふ夜の台所　　子規（三九一頁）
栗飯ノ四椀ト書キシ日記カナ　　子規（四〇五頁）
栗飯ヤ病人ナカラ大食ヒ　　子規（四〇七頁）

梨腹モ牡丹餅腹モ彼岸カナ　子規（四〇七頁）
朝な〳〵 粥くふ冬となりにけり　子規（四一九頁）
カブリツク熟柿ヤ髯ヲ汚シケリ　子規（四一二頁）
柿くふも今年ばかりと思ひけり　子規（四一二頁）
鄙ノ宿夕顔汁ヲ食ハサレシ　子規（四一三頁）
枝豆ヤ病ノ牀ノ昼永シ　子規（四一六頁）

参考のために、「仰臥漫録」に初めて記された、九月二日の子規の食事内容を挙げておく。

朝　粥四椀、ハゼノ佃煮、梅干砂糖ツケ
昼　粥四椀、鰹ノサシミ一人前、南瓜一皿、佃煮
夕　奈良茶飯四椀、ナマリ節煮テ　茄子一皿
　　少シ生ニテモ
此頃食ヒ過ギテ食後イツモ吐キカエス
二時過牛乳一合コヽア交テ
　煎餅菓子パンナド十個許
昼飯後梨二ツ
夕飯後梨一ツ

食欲はあって大食するのであるが、内臓は弱っており、食後はいつも吐きかえす。それでもなお、食べたいのである。十月二十五日の「仰臥漫録」には、「余モ最早飯ガ食ヘル間ノ長カラザルヲ思ヒ今ノ内ニウマイ物デモ食ヒタイトイフ野心頻リニ起リシカド」（『子規全集　第十一巻』四七九頁）とある。体は衰弱し、死期の近づいていることを自覚しつつも、旺盛な食欲に支えられていた子規の晩年の作品に、「食べる」ことを詠んだ作品の見られることが、子規晩年の作風の印象を明るいものにしている。

病床ノナガメ　子規（四一三頁）

（2）　棚ノ糸瓜思フ処ヘブラ下ル

「仰臥漫録」（九月二日）所収。糸瓜棚を作り、糸瓜を絡ませたところ、実が太り、思う所へぶらりと垂れ下がっていることだ、との句意。糸瓜棚は「墨汁一滴」（六月十二日）に「植木屋二人来て病室の前に高き棚を作る。日おさへの役は糸瓜殿夕顔殿に頼む積り」（『子規全集　第十一巻』二〇七頁）とあり、糸瓜とともに夕顔も絡ませていたことがわかる。

今までは、大木の椎の木が子規庵の象徴的存在で、明治三十二年には

椎の舎の主病みたり五月雨　子規

という句を作っていた。それが、強い日射しを避けるために作った糸瓜棚とそれに咲く糸瓜の花とぶらさがる糸瓜の実が子規庵の象徴となっていくのである。

九月二日の「仰臥漫録」には、「庭前の景は棚に取付てぶら下りたるもの／　夕顔二三本瓢二三本糸瓜四五本夕顔／とも瓢ともつかぬ巾着形の者四ツ五ツ」（『子規全集　第十一巻』三八五頁）とあり、夕顔、糸瓜、瓢を中心とした句が一度に多作されている。次にその一部を挙げておく。

夕顔ノ実ヲフクベトハ昔カナ
夕顔モ糸瓜モ同シ棚子同士
夕顔ノ棚ニ糸瓜モ下リケリ
夕顔ノ太リ過ギタリ秋ノ風
棚一ツ夕顔フクベヘチマナンド
糸瓜ブラリ夕顔ダラリ秋の風
病間ニ糸瓜ノ句ナド作リケル

さらに、九月九日の「仰臥漫録」には、

主病ム糸瓜ノ宿ヤ栗ノ飯　子規（四〇五頁）

を作り、自分の庵を「糸瓜の宿」と表現している。病床から最も近

くに見られる糸瓜は、病苦に喘ぐ子規にとって、心を慰めてくれる植物となっていった。糸瓜に心を通わせている句は、次のように見られる。

家庭ノ快楽トイフコトイクラ云フテモ分ラズ
物思フ窓ニブラリト糸瓜哉　子規（四一四頁）
黙然ト糸瓜ノサガル庭ノ秋　子規（四〇四頁）
草木国土悉皆成仏（二句）
糸瓜サヘ仏ニナルゾ後ル、ナ　子規（四一七頁）
成仏ヤ夕顔ノ顔ヘチマノ屁　子規（四一七頁）

飄々としたイメージの糸瓜を見て、一種悟りのような境地となって、心が鎮められていくのである。悶々とする気持ちで外を眺めると糸瓜が「ブラリト」あるいは「黙然ト」さがっている。そして、糸瓜さえ仏になろうとしている。美しい夕顔も屁のような見栄えのしない糸瓜もみんな等しく成仏していく。自分もいつまでも悶々としないで、大悟しなくては、と思うのである。

この他、病床から庭を眺め、次のような草木が詠まれている。

寝牀から見ゆる小庭の牡丹かな　子規（四〇二頁）

「日本及日本人」（大正十四年十一月）に「子規居士墨跡の逸品」として発表された大川澂氏紹介の句稿・全十三句」のうちの一句。この十三句の中で公に同時に次の五句が発表されている。

吾庭にはじめて咲ける牡丹かな　子規（四〇一頁）
低過ぎし牡丹の傘や春の雨　子規（四〇二頁）
傘立て、雨横しぶく牡丹かな　子規（四〇二頁）
傘立て、雨だれかゝる牡丹かな　子規（四〇二頁）
手燭して見する月夜の牡丹かな　子規（四〇二頁）

初めて植えた牡丹の花。雨に打たれて散らぬように、傘を立ててやっているのである。傘を立てられて咲く牡丹の花は、牡丹の花の詠み方としては新しい。

方百里雨雲よせぬ牡丹哉　蕪村「新花つみ」第五巻四七八頁

と詠まれた蕪村的な豪華な牡丹の花ではなく、雨に打たれぬように傘で護られた牡丹の花は、子規の大事な宝であり、多勢の人々に守られつつも次第に弱っていく子規自身でもあった。「手燭して」には蕪村句的な妖艶な句風が感じられるが、それ以外は写生によって、新しい詠み方を試み、牡丹の花の新たな美の世界を作ったものとして評価できる。

臥シテ見ル秋海棠ノ木末カナ　子規（四一四頁）

「仰臥漫録」（九月九日）所収。病床に横たわったまま、秋海棠の木末を眺めていることだ、との句意。この病床からの視点で描かれた有名な作品に、

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり　子規

がある。この短歌は、この年の四月二十八日付の「日本」に発表されている。「たゝみの上にとゞかざりけり」に、病床にあって低い視点で活けられた藤の花を眺めていることがわかる。掲句は、「臥シテ見ル」と視点を明らかに表現し、秋海棠ノ木末を眺め、さらにそこに広がる青空を眺めているのである。同日に記されている句に、次の二句がある。

秋海棠ニ向ケル病ノ寝床カナ　子規（四一五頁）
秋海棠朝顔ノ花ハ飽キ易キ　子規（四一四頁）

美人にたとえられて詠まれてきた秋海棠の花を眺めたいとの思いで、寝床を秋海棠に向け、臥して眺めていたのである。

（3）　病牀ノウメキに和シテ秋ノ蝉　子規（四〇八頁）

「仰臥漫録」（九月九日）所収。痛みに耐えかねて、うめき声をあげる。その声に唱和するかのように、秋の蝉の声が聞こえてくる

ことだ、との句意。同日の記録に「蝉ツクヽボーシノ声暑シ」とある（『子規全集　第十一巻』四〇三頁）。健康な人間にも蝉の声は暑苦しい。ましてや、重病で激しい痛みに耐えている子規にとっては、精神を苛立たせる蝉の声であったのだが、掲句では淡白に「ウメキニ和シテ」と表現している。

激昂した気持ちを、ストレートに出している作品には、次のようなものがある。

九月蝉椎伐ラバヤト思フカナ　　子規（四〇九頁）
夕飯ヤツクヽボーシヤカマシキ　　子規（四一〇頁）
秋ノ蠅叩キ殺セト命ジケリ　　子規（四一一頁）

この他に、病身を詠んだ句として、次のようなものがある。

筍に虫歯痛みて暮の春　　子規（三七八頁）

「日本」（四月十六日）の「墨汁一滴」に発表。好物の筍だが、噛めば虫歯が痛む。おいしく食べられぬまま、春も暮れてゆくことだ、との句意。「筍」は古句には、

筍や児の歯くきの美しき　　嵐雪「炭俵」「別さしき」第五巻四五六頁

と歯ごたえのよい筍とそれを噛む児のピンク色の歯ぐきとが取り合わされ、健康的なイメージの句があった。これに対し、歯が痛み、食欲があるにもかかわらず食べられぬ境涯を詠んだもの。古句の逆発想として、「筍」が「虫歯」と取り合わされる句材として効いているのである。

五月八日頃、左右の臼歯が左右共に損われて、上下の歯を噛み合わせることが困難になる。柔らかいものも噛まずに呑み込まなくてはならぬ状態となり、栄養も十分にとれず、味わう楽しみも奪われていき、「人間は何が故に生きて居らざるべからざるか」と悶々とする（「墨汁一滴」（五月九日）『子規全集　第十一巻』一八四頁参照）。こういった苦しみを、「墨汁一滴」（五月九日）に長歌、短歌にも詠んでいるので挙げておく。

さへづるやから臼なす、奥の歯虫ばみけらし、はたつ物魚もくはえず、木の実をば噛みても痛む、武蔵野の甘菜辛菜を、粥汁にまぜても煮ねば、いや日けに我つく息の、ほそり行くかも
下総の結城の里ゆ送り来し春の鶉をくはん歯もがも
菅の根の永き一日を飯もくはず知る人も来ずくらしかねつも

虫歯に苦しむ句は、この他にも取り合わせを変えて、次のように詠まれている。

抱籠を抱いて虫歯に泣く夜かな　　子規（三九四頁）
縁端や虫歯抱へて夏の月　　子規（三九六頁）

十分に食べられぬ日々が続き、子規の体はますます痩せ衰えていく。痩身を次のように詠んでいる。

ツクヾヽト我影見ルヤ虫ノ声　　子規（四〇九頁）
痩臑ニ秋ノ蚊トマル憎キカナ　　子規（四一〇頁）
痩骨ヲサスル朝寒夜寒カナ　　子規（四〇五頁）

（4）　真心ノ虫喰ヒ栗ヲモラヒケリ　　子規（四一二頁）

「仰臥漫録」（九月十七日）所収。長塚節が、栗を送ってきてくれたが、それは虫喰いのできの悪いものであった。しかし、モノを送ってくれるというその真心が嬉しいのだ、との句意。病床の子規を慰めるために、いろいろな人々がいろいろなものを送ってきてくれる。それに誠意を感じ、掲句のようにそれを直接的に表現している句が次のように見られる。

大坂青々ニ酬ユ
奈良漬ノ秋ヲ忘レヌ誠カナ　　子規（四〇四頁）

野老氏ニ酬ユ
吾ヲ見舞フ長十郎ガ誠カナ　　子規（四一一頁）

これらは子規の生前には公には発表されていない。人々から物を貰った句を公にした作品は次のように平淡に表現されている。

節ヨリ送リコシ栗ハ実ノ入ラデ悪キ栗也　　節ヨリ送リコシ栗ハ実ノ入ラデ悪キ栗也

年玉を並べて置くや枕もと　　子規（三七六頁）
　或人苔を封じ来るこは奈良春日神社石灯籠の苔なりと
苔を包む紙のしめりや春の雨　　子規（三八二頁）
病人に鯛の見舞や五月雨　　子規（三九六頁）

（四）　平淡な表現と月並

即事（二句）

（1）　イモウトノ帰リ遅サヨ五日月　　子規（四〇八頁）
　母ト二人イモウトヲ待ツ夜寒カナ　　子規（四〇八頁）

「仰臥漫録」（九月十七日）所収。「繃帯取代後四谷加藤へ行ク加藤転居後始メテ行ク也　オ土産ハ例ノ笹ノ雪」とある。叔父の加藤拓川宅へ行った律。妹の帰りが遅いのを心配しながら待っている様子を、「即事」つまりたまたまできた句としている。無造作に感興の趣くままに一句にしたものではあるが、不安な気持ちが「夜寒」「五日月」という季題の情趣に適っており、平淡な味わいのある句となっている。

明治三十三年に「信州の人某々来りて俳句の作やうを問ふ。俳句は即景をよむべしといふことを」として即事三句を作った子規であった（「日本」明治三十三年十二月十四日、『子規全集　第三巻』三六五頁）。その中の一句

信州の人に訪はれぬ冬籠　　子規

は、地名「信州」を活かした即興性に面白味があった。即事でありながら、ただ事では終っていない点に、文芸的価値があるのである。掲句も、即景・即事であり、無造作な印象を与えるとともに、ただ事では終らぬ平淡な味わいのあることが指摘できる。このような即事即景的趣きがあり、平淡な味わいのある句として次のような句が挙げられる。

秋モハヤ塩煎餅ニ渋茶哉　　子規（四〇三頁）

「仰臥漫録」（九月二日）所収。秋もたけなわのある日、塩煎餅に渋茶をすすりながら、過ぎゆく庭の秋の景を眺めていることだ、との句意。「『秋モハヤ』との感慨は、庭前の光景から触発されたものであろう」と宮坂静生氏は『子規秀句考―鑑賞と批評―』（四三六頁）の中で指摘しておられる。確かにそのとおりであろう。しかし、「秋モハヤ」という表現は次のように古句に用いられており、それがふと口をついて出てきたものと考えられる。

秋もはや雀のとりし蝉の声　　成美「随斎句藁」第六巻三三八頁
秋もはや一ふし白き木賊哉　　五明「記入なし」第六巻三四四頁
秋もはや日々兀て山畠　　野坡「句鑑」第六巻三四九頁
秋もはや目には団の鼠くひ　　士朗「記入なし」第六巻三五二頁
秋もはや隣に朱の神門哉　　乙由「麦林集」第六巻三五六頁

掲句の場合、「秋もはや」という感慨をもよおしたモノを表現せず、直接には関係のない「塩煎餅ニ渋茶」を取り合わせたのだが、それがたまたま秋たけなわの情趣に適っていたのである。

ところが、平淡・無造作の句はややもすると、ただ事の俳句に陥ってしまう危険性がある。明治三十三年に「俳句は即景をよむべしといふことを」として示した「即事三句」のうちの二句は次のようなもので、面白味はない。

菓子箱をさし出したる火鉢哉　　子規
煎餅かんで俳句を談す火鉢哉　　子規

このただ事俳句への批判が、「ホトトギス」内部の中から出てきたことを指摘し、この時期の子規俳句の一面を明らかにしておきたい。

（2）　山吹やいくら折つても同じ枝　　子規（三九二頁）
　　山吹や何がさはつて散りはじめ　　子規（三九二頁）

「日本」（四月二十一日）、「日本」（四月二十五日）の「墨汁一滴」に両句共に発表。この二句について、碧梧桐は「極印つきの月並だ」とし、詰問的な蕪辞を並べた手紙を子規に送った。これに対し、子規は四月二十五日の「墨汁一滴」で、次のように返答した（『子規全集　第十一巻』一七一頁～一七三頁）。

まず、前掲の二句については「主観的の句」であるが「月並調に非ずと思ふ」と碧梧桐の批判を否定。これが「山吹」ではなく「夕桜」ならば、「下七五の主観的形容が桜に適切ならぬためことさらめきて厭味を生ずる」ので、月並調となると述べている。

山吹の句については、これだけの説明であり、次に「余が月並調と思へる句は左の如き句なり」と逆襲した。子規が挙げたのは、碧梧桐の句も含めた次の七句である。

二日灸和尚固より灸の得手　　碧梧桐
草餅や子を世話になる人のもと　　挿雲
手料理の大きなる皿や洗ひ鯉　　失名
七草や余所の聞えも余り下手　　太祇
七草や腕の利きたる博突打　　同
帰り来る夫のむせぶ蚊遣かな　　同
春もや、けしきと、のふ月と梅　　芭蕉

そして、「二日灸」の句は「二日灸」という語が月並的臭気を含み、「和尚固より灸の得手」という言葉遣いが月並調であるとし、「帰り来る」の句は趣向が月並であるとする。このような子規の返答を、碧梧桐は納得せず、他の句ではなく山吹の句の是非が問題であるのにそれを回避する論法を「甚だずるい」とし、また例会の時に出しただけで世に発表していない自分の作品を月並俳句として掲出するのは「少々卑怯」だとして、直接談判に出かけている（「月並論」『子規の回想』昭南書房　昭和十九年六月　四一〇頁～四一九頁）。その結果が五月八日の「墨汁一滴」である。ここでは、特に「手料理の」の句だけを取り上げて、次のように説明している。

「この句手料理も大きなる皿も共に俗なり」、「碧梧桐いふ、手料理といひ料理屋といふは常に我々の用ゐる所、何が故に此語あれば月並調といふか。余いふ、そは月並派の仲間入でも為さば直に分る事なり、先づ月並の題に初松魚といふ題出でたりとせよ、此題を得たる八公熊公の徒は」「大概は著物を質に置くとか手料理で一杯やるとかいふやうなきまり文句を並べて出すなり、さういふ句に飽きたる我等は最早手料理といふ語を聞いたばかりにて月並臭を感ずるやうになれり」。「手料理といふ語は非常なる月並臭を感ずれども料理屋といふ語には臭気無し。これは月並派にて手料理の語を多く用ゐれども料理屋といふ語を用ゐぬ故なり」（『子規全集　第十一巻』一八三頁）。

このように、月並俳句を用語のレベルで説明している。ただし、実践重視の子規らしく、「併し手料理といふ語あればいつでも月並調なりといふにはあらず」。「斯る事は実際に就いて知るべく、理を以て推すべからず」と付け加えている。

この論争は、とりあえずはここで終わっているが、碧梧桐の不満は解消しなかった。昭和十九年の『子規の回想』（同前）で、子規のこの説明に対して「山吹の句については、何の記すところはなかった」と不満を述べた上で、山吹の句が観念的であり、写生を重んじる我々の写生道から見ても邪道であると批判している。さらに、「子規の月並論は、月並宗匠のよく使ふ言葉であるから、といふ理論的には甚だ薄弱な根拠もある」と述べ、用語のレベルでの月並論の理論面での弱さを指摘している。

以上が、「山吹」の句を発端とする子規・碧梧桐の月並論争の概容である。

子規が自分の山吹の句についての詳細な説明を避けているのは、

子規自身その句が月並であったと内心認めていたためであろう。碧梧桐の指摘どおり、山吹の句は山吹に対する作者の感情が感じとれない、抽象的・観念的な句である。また、用語のレベルで月並かどうかを云々するのも理論的に弱い。「手料理」の句は、釣ってきた鯉を家で生け作りにした。それをいつもは使わない大皿に豪華に盛ったことだ、との句意。「手料理」が月並俳人によく使われていた言葉だということを気にしなければ、写生的な句として鑑賞してよいであろう。この点までは、碧梧桐の意見は妥当と考えられる。

平淡で素直な表現によって、蕪村調から脱して子規調を確立しつつあった子規であったが、ただ事俳句に陥った句も一方ではあった。即時即景を詠み、無造作の作風を尊んだ時期であったが、即時即景が全て文芸的価値をもつ俳句となるとは限らない。一見無造作、即時即景のようでありながら、意匠・表現の面での工夫が必要とされるのである。

（五）　一意十様の試み

病床の子規を慰めるために、さまざまな人々が、さまざまな物を持参したことは前にも述べた。伊藤左千夫もまた子規のために、鯉三尾を携えてやってきた記事が「墨汁一滴」（三月二十六日）に次のように見られる。

「ある日、左千夫、鯉三尾を携へ来り、之を盥に入れて吾病牀の傍らに置く。いふ、君は病に籠りて世の春を知らず。故に今鯉を水に放ちて春水四沢に満つる様を見せしむるなりと。いと興ある言ひざまや。さらば吾も一句ものせんとて考ふれど思ふやうに成らず。とやかくと作り直し思ひ更へてやう〳〵十句に至りぬ。さはれ数は十句にして十句にあらず、一意を十様に言ひこゝろみたるのみ。

春水の盥に鯉の喰喝（あぎと）かな
盥浅く鯉の背見ゆる春の水
鯉の尾の動く盥や春の水
頭並ぶ盥の鯉や春の水
春水の盥に満ちて鯉の肩
春の水鯉の活きたる盥かな
鯉多く狭き盥や春の水
鯉の吐く泡や盥の春の水
鯉の背に春水そゝぐ盥かな
鯉はねて浅き盥や春の水」

（『子規全集　第十一巻』一四六頁～一四七頁）

病室に籠りっきりの子規のために、鯉を盥の水に放ちて春水四沢に満つる様に見立てようという左千夫の言葉を面白く思い、いつもの一題十句を試みようとしたものであろう。ところが、今までのように連想を働かせて自由に一題について作った方法とは異なり、中心の句材の「鯉」、「春水四沢に満つる様を見せしむるなり」の左千夫の言葉受けた「春の水（春水）」と「盥」が全ての句に用いられている。

この試みについて、山下一海氏は『俳句で読む正岡子規の生涯』（永田書房　平成四年三月）の中で次のように指摘しておられる。

「一句の半分以下の音数を使って、どれだけの変化が得られるのかの実験であるといってもいいだろう。かならずしも一句一句は佳句というわけではないし、十句が複雑多彩に変化するというわけではもちろんないのだが、十句はけっこうそれぞれに違っていて、同じような句が並んでいるという印象はない。題材が同じだから、かえって各句間の微差がわかりやすい」。「子規が前文に〈さはれ数は十句にして十句にあらず、一意を十様に言ひこゝろみたるのみ〉と記すのは謙遜ではない。一意を十様に言いこころみるというのは、自分の伎倆を誇示することである。一句の意もさることながら、一意を十様に表すというそ

の〈様〉に俳句表現の特色が現れる。極小の詩型は、多様な表現効果を上げるために新しく変わった語を求めても、すぐに底が割れて、言葉の新しさが一句の新しさとはならない。一句はありふれた語であっても、その組み合わせと配列の仕方によって新しくなることができる。短詩型はそれによって無限の多様性を持つことができる」（三二三頁～三二四頁）。

この試みの発想として、明治三十三年に試みた「一句二題」があったのではないかと考えられる。これは、「試に狭き窮屈なる題を出して諸氏の句を請ふ。各人の作がどれだけ変化するかを見んと欲せしなり」（「ホトトギス」明治三十三年三月　『子規全集　第五巻』四一一頁）という語の組み合わせと配列によって、作品がどのように変化するかを試みようとしたものであった。たとえば、「乾鮭鬼」という題を一句の中に詠み込んだ各人の作は、

乾鮭の貧や鬼王団三郎　　鳴雪
乾鮭や鬼の涙もかれぐに　　碧梧桐
乾鮭や鬼の念仏藤娘　　四方太
乾鮭や壁に鬼形の神の札　　青々
鬼婆や乾鮭の骨を釣るしけり　　虚子
乾鮭の頭めでたし鬼退治　　子規

といったもので、子規は「此題は変化ありて面白し。乾鮭に鬼といふ配合に趣味を含む故にやあらん」（同前）と述べている。

取り合わせに趣味を含めば、変化のある作品が作れるのではないかと考え、「鯉を水に放ちて春水四沢に満つる」という趣向の「鯉」「春水」「盥」という一句三題を、十句一人で作るという一意十様の試みを行ったのではないだろうか。山下氏も指摘されていたように、「一意を十様に言いこころみるというのは、自分の伎倆を誇示すること」である。無造作、即景の句を佳しとし、そのような句を作りつつも、一方では変化のある工夫を凝らした句を作り出す試みも行っていたのである。

おわりに

病気のますます悪化していく状態で、子規は写実的な句、境涯句、一意十様の句とさまざまな句を作っていた。

この年の大きな特色としては、まず、日よけ用の棚を作り、糸瓜・夕顔・瓢を絡ませたために、これらの句が多作されたことが挙げられる。これらの素材のもつ情趣と、子規の悶々とした心情とが響き合い、写生を超えた心境句も作られていた。子規の絶筆三句の糸瓜の句につながるものが、この年に整えられていたと考えられる。

二点目は、平淡な味わいのある句を作りつつも、何の面白味もないただ事の俳句も作っており、それが「ホトトギス」内部の碧梧桐によって批判されていたことである。見るもの聞くもの何でも面白く、口をついて出てくる俳句の中に、平淡なあるいは無邪気な趣のある佳句もある一方で、自己満足に終わった文芸的価値のないものもあった。「無造作」も紙一重でただ事の俳句になってしまう。蕪村的な俳風から脱け出して、自己の俳風を確立する時期に（注二）、一つの大きな課題を抱えていたのである。

三点目は、「無造作」「即景」を尊ぶ一方で、「一意十様」という変化のある「工夫」の句を作っていたことである。一つの理論に偏らず、実作においてはバランスをとりつつ句作をしていた。このことが晩年のこの時期においてもなされていた点に注目したい。碧梧桐の批判した面白味のない句風に流れてしまわなかったのは、このような「工夫」の意識を失わなかったことも理由の一つとして考えられる。

注（一）　本名、鈴木孫彦。静岡県生。教員。熊本、山口、京城等の商業学校に奉職。俳句を子規に学び、平井聖天の丁堂和

尚蔵「南岳草花画巻」譲渡の一件の仲介人の一人として知られる（『子規全集　第二十二巻』七七〇頁）。

（二）　蕪村調・蕪村的発想から脱皮しつつあったのは明治三十二年ころであったことは「岡山県立大学短期大学部研究紀要　第七巻」（平成十二年三月）において述べた。

引用・参考文献

正岡子規『子規全集』全二十二巻　講談社　昭和五十年四月～昭和五十三年十月
正岡子規『分類俳句大観』全十三冊　日本図書センター　平成四年復刻版
河東碧梧桐『子規の回想』　昭南書房　昭和十九年六月
宮坂静生『子規秀句考―鑑賞と批評―』　明治書院　平成八年九月
山下一海『俳句で読む正岡子規の生涯』　永田書房　平成四年三月

〔二〇〇〇年十一月三十日受付
二〇〇〇年十二月二十二日受理〕